青山　亜紀　先生

『ミラノ　霧の風景』

もう 20 年くらい前のことになりますが、ふと立ち寄った書店で偶然にこの本を見つけました。それまで私は、好きな作家を目当てに購入する本を選んでいましたが、この時はなぜか「ミラノ　霧の風景」という題名にひかれてこの本を買ったのです。今でこそ須賀敦子は、完成された美しい文章で素晴らしい作品を生み出した女流作家として知ら
れていますが、その時の私は彼女のことを全く知りませんでした。

『なんて切ない文章なんだろう。』この本を読み始めてほんの数ページで私はそう感じました。『いまは霧の向こうの世界に行ってしまった友人たちに、この本を捧げる。』と、あとがきにあるように、この本は、彼女が過ごした 13 年間のイタリアでの出来事、出会った人たちとのふれあい、そして多くの別れを、霧の流れのようにゆっくりと回想するエッセイです。美しい文章の中に綴られているイタリアの町の香りや霧のにおいなど、自分も知っているような感覚に陥り、また、大切な人との別れを描いた場面では、胸が締め付けられるような切なさがこみ上げ、私はすっかり須賀敦子の世界へ引き込まれていきました。その後私は彼女のほとんどの作品を読むこととなったのですが、「ミラノ　霧の風景」は、そのきっかけとなった大切な本です。

『新訳　星の王子さま』

知らない人はいないのではないかと思うほど、「星の王子さま」の認知度は高いでしょう。私も子供のころから「星の王子さま」の本を持っていましたが、本の中に描かれている可愛いイラストにひかれて購入しただけで、何となく子供向けのお話しであるという程度でしかその内容について知りませんでした。2005 年に原著版の著作権が切れたことをきっかけに多くの翻訳本が発刊され、とても大きな「星の王子さま」ブームが起こりました。それらの中でも特に、倉本由美子によって翻訳されたこの「新訳　星の王子さま」は、最も美しい日本語でストーリーが語られ、「大人の為の『新訳』」との評判だったため、改めて読んでみました。

「目では何にも見えないよ。心で見ないとね。」これは、王子さまとキツネとの会話のなかでの最も印象的な言葉です。私たちは物事を一面的に捉えてしまう傾向にあります。そのために思い違いや偏見が生まれ、様々な問題が起きてしまうことがあります。表面的な理解では、物事の本質を知ることはできないということを、改めて考えさせられた深い言葉でした。読み進める中で、このほかにもとても素敵な、そして、深く考えさせられる言葉の数々に出会うことができるでしょう。

『生き方の演習―若者たちへ―』

「なぜ本を読まなくてはならないのですか？」「教養ってなぜ必要なのでしょう？」「外国語はなぜ学ぶのですか？」これらについて、皆さんは的確に答えることはできるでしょうか？このような、一見すると当たりのように思えるシンプルな事柄のなかに、人生における多くの大切なことが在るのだと思います。

この本の著者である塩野七生は、「ローマ人の物語」を代表作に持つ歴史作家として世に広く知られていますが、多くのエッセイも手掛けています。今回紹介する「生き方の演習―若者たちへ―」もその中の一冊であり、これから社会へ出ていく若者たちに向けて、人生についてのアドバイスとして書かれたエッセイです。冒頭で挙げたような簡単な、しかし、人生にとって大切であろうテーマについて、著者は長きにわたるイタリア生活での経験、さらに古代ローマ史やイタリア史から感じ取った学びを軸として、規定概念にとらわれない見解を述べています。この本を読むことで「わかっているつもりになっているだけの残念な大人」にならないように、日常生活の中で通り過ぎてしまっている様々な事柄について、社会人になる前に改めて考えてみてほしいと思います。

北田　典子　先生
『置かれた場所で咲きなさい』 　スポーツ競技生活の中で、順調に進める人はいないでしょう。多くの壁にぶつかった時、自己啓発本を手に取る人も多いと思います。この本は読みやすく、「どんな場所、環境であっても自分の花を咲かせること」心の持ち方、生活の仕方で「感謝できる人間になる」人に感謝できると言う事は、自身に感謝できること、壁にぶつかった時こそ自身に感謝して、認めてあげてほしと思います。壁は成長のあかしですから。
『北の海』 　日本を代表する小説家井上靖先生の自伝的小説。「北の海」には決して優等生でもなく、受験に失敗し、浪人生でありながら小柄の青年が柔道に魅せられ、厳しい柔道の稽古に明け暮れた青春時代が描かれています。「稽古量がすべてを決する」と青春時代に培った心身の鍛錬こそが、小説家・井上靖を作ったと言っても過言ではない。と仰られていました。 文化功労者、文化勲章受章され、晩年は日本の柔道界にも多大なるご尽力をされました。
『夢をかなえるゾウ』 　こちらも簡単で読みやすい物になっていますが、それぞれの課題を実践し身に着けるまで継続する大切さが書かれています。「本気で変わろうと思ったら、意識を変えようとするのではなく、具体的な何かを変えなくてはならない」偉人のエピソードなどを含め、自身に当てはまる課題解決方法が見つかるかもしれません。

山﨑　眞紀子　先生

『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

最近はノーベル文学賞候補者としてニュースで名を聞いている人も多いかもしれません。1979 年に『風の歌を聴け』でスタイリッシュな文体でさっそうとデビューし、新たな文学シーンを展開した村上春樹も、いまや 70 歳。大学生にとってはもはや祖父の年代となりました。

有名だから読んでみたいけど性描写がいやらしくて受け入れられないとはよく耳にする批判です。性を描くのは、隠蔽されている根本的な人間の問題を描きたいから。文学にとって感情のゆらぎを描くことは欠かせないことです。古典的な言い回しですが、人間とは何かを考えるために文学があるとして、難しいことを難しく語るのではなく、SF やミステリーなどエンターテイメント的な装いで深い思考ができる小説を目指して書かれたのが本作です。

主人公を導くピンクの太った女の子や、クローゼットを開けると地下に続く川が流れている仕掛け、やみくろが闊歩する青山外苑前の地下道。何度読んでもそのたびに新しい発見のある面白い作品です。

『二百回忌』(『笙野頼子三冠小説集』所収)

「芥川賞」、「野間文芸賞」「三島由紀夫賞」の 3 冠に輝く作家の、とても面白い作品です。一筋縄ではいかない作家ですが、そこがまた魅力的。

タイトルからわかるように、本作は二百回忌法要が作品の主要な舞台となっています。ふつう、法事は一回忌、三回忌、七回忌…せいぜいが三十三回忌で終わりです。なんと本作では二百回忌。主催者は全財産を費やして行わなければなりません。二百年分の時間が現在の時間と接続され、死者がよみがえり、前後の文脈にお構いなく好き勝手に饒舌に語り始め、カーニバルのようです。200 年の時空間は現実とは大いにずれて、ゆがんでいます。

法事への招待状は金の太陽に烏を黒く抜いた紋の入った真っ赤な封筒で届き、出席者は赤の式服、バッグも靴も靴下もすべて赤い色のものを身につけ、供されるのは赤唐辛子汁。すべてにおいて法事の概念を壊し、その崩し具合が何とも面白いのです。もちろん、家父長制への批判が含まれています。

あたりまえと思われていることを疑うことから始めることが学問への第一歩。読んで、現実を壊す醍醐味を味わってください。

『父と私の桜尾通り商店街』

2010 年に太宰治賞受賞作品『こちらあみ子』でデビューした作家の最新短編集です。私にとっては久々に夢中になった作家です。その逸材ぶりに、ある評論家は「こんな隠し玉があったのか！」と見事に表現していました。

2 冊目の本は『あひる』。具合が悪くなったあひるが治療に何回か出て、戻ってくるたびに異なるあひるになっているような気がするのに、誰も気がつかない…。2016 年に河合隼雄物語賞を受賞しました。

ある新興宗教に夢中になった親をもつ『星の子』は芥川賞候補作になり、また、筆力ある新人に送られる野間文芸新人賞を受賞しました。本作が 4 冊目の単行本となります。

私が特に好きな本作の短編作品は巻頭の「白いセーター」と、表題作になっている「父と私の桜尾通り商店街」です。皆とどこか違う独特の空気感をまとう主人公が勢ぞろいています。

今村夏子の作品の魅力は、独特の「」にあり、金切り音が響き渡っているような効率性優先で勝ち組や負け組と仕訳されていく現代社会を、ほんの少し柔らかなものに変えてくれている気がします。

辰田　和佳子　先生

『それしかないわけないでしょう』

5 分で読める絵本です。大学を選ぶ時、部活を続けるか迷った時、いままでも何かしらの選択をしてきたと思います。これからも就職や転職、結婚や子育てといったキャリアの選択、大きなことでなくても毎日何かしらの選択をしていくでしょう。そんな時に選択肢はどちらかしかないわけじゃないよねとシンプルに声掛けをしてくれる本です。

ヨシタケさんの絵本は子供向けですが、多様性やそれぞれが抱える悩みを題材にしたものが多く、大人が読んでも何か感じられることがあるかもしれません。

『栄養データはこう読む！』

こちらは少し学術的要素が入った本です。「驚異のダイエット法！」「これで簡単に筋量アップ！」「これを食べれば美肌に！」などのタイトルに惹かれてしまう人にぜひ読んでほしい。

内容は栄養疫学中心に展開されますが、研究データをどのようにとらえるか、アクセスすべき情報はどこにあるのか、どのような心構えと知識を持って情報を選択すべきなのか、栄養以外のことにも共通する内容が具体的に解説されています。

情報があふれる中で、なにが正しいか、役に立つのかわからなくなった時、卒論・卒研に向けた論文の解釈がわからない時などにおすすめです。

日吉　秀松　先生

『動物農場　新訳版』

いまこそジョージ・オーウェルの『動物農場』を読むべきだ

豚を中心にして、動物だけの平等社会を目指す革命を起こし、荘園農場の経営者ジョーンズを追放した。革命が成功した後、豚の内部は権力闘争が起こり、野心的なナポレオンが主導権を握り、残酷な独裁者となった。結局は、豚が新たな特権階級として動物農場に君臨し、恐怖政治を通じて全体主義体制を確立し、本来、動物たちが目指した平等の社会がやがて崩壊し、かつての荘園農場よりも過酷な社会となってしまった。最後に動物たちはまた蜂起した。これはイギリス作家であるジョージ・オーウェルによって書かれた全体主義への批判する政治寓話『動物農場』である。この政治寓話を読むと、現実の世界と照らして社会主義革命や権力の本質について考えさせられる。

原　怜来　先生

『稼ぐがすべて　B リーグこそ最強のビジネスモデルである』

葦原一正著　あさ出版　2018 年

現在、スポーツ界は変革時期にあり、競技種目によって改革のスピードに差が出てきています。近年、一気に飛躍した競技の１つが、バスケットボールです。経営には、ヒト・モノ・カネが必要と言われますが、これらをどのように揃え、変えてきたかが分かる一冊になっています。皆さんの中には、漠然とスポーツ業界で働きたいと思っている人が多いのではないでしょうか。実際、学生さんから相談受けることもありますが、スポーツ界に入るのは狭き門と言えます。どうやったら入れるのか、また、それだけでなく、社会人スキルとして重要なリーダーシップとは何か。それらの内容が分かりやすく書かれている本です。スポーツ界は今後一気に飛躍する分野であり、飛躍すべき分野であると思っています。また、それを担うのは、若い考えを持つ皆さんです。今後より良いスポーツ界を作っていくにあたり、是非皆さんに読んでいただきたい一冊です。

松尾　絵梨子　先生
『働き方の哲学』 村山 昇著　ディスカヴァー・トゥエンティワン　2018 年 皆さんはどのような人生を送りたいか考えたことはありますか？大学での 4 年間が終わり社会に出れば、否が応でも働かなくてはなりません。なぜ人は働くのでしょうか。どう働いたら良いのでしょうか。PART 1「仕事・キャリアについて」の冒頭、「1 日 8 時間×35 年＝62,440 時間を仕事に捧げる、仕事が上手くいっていないとご飯もおいしくない」と書かれています。これからの人生の中で多くの時間を仕事に費やすのであれば、充実した毎日が送れるような働き方をしたいですよね。 本書では、職業の種類や働くかたちを知り、仕事を多面的に捉え、仕事をする上で必要となる能力や働く意味、会社組織の理解と働く際のメンタルヘルスについて、様々な方向性からわかりやすく解説しています。どのような職業に就き、どんな人生を送りたいのか。就活を控えた学生はもちろんのこと、社会人にも是非読んでもらいたい一冊です。